

D-2 「からといって」の出現環境とその意味的・語用的特徴

窪田愛
ai.kubota.m@gmail.com
国立国語研究所

概要

理由を表す副詞節に現れる「からといって」は、同じく理由を表す副詞節に現れる「から」に比べると、その使用には特徴的な制限がみられる。「からといって」は、典型的には「のではない」「訳ではない」「とは限らない」などの否定表現と共起することが多いが、先行研究で指摘されている通り、明示的な否定形式を伴わない場合もあり、「からといって」には「推論の否定」という意味的・談話的特徴があるとされる(金子, 1998; 小金丸, 1990; 高橋, 2015; 藤田, 2000; 馬場, 2018; 山口, 1987)。本研究は、これまで明らかにされてきた「からといって」の記述的な特徴を踏まえ、Farkas and Bruce (2010) で導入されている談話構造に関するモデルを想定した分析を提案することで、「からといって」の特徴的な分布やその意味的・談話的特徴に関して理論的な説明を試みるものである。

1 はじめに

「から」「からといって」はいずれも理由を表す副詞節に現れるものだが、「からといって」は「から」に比べるとその出現環境に制限がある。例えば、以下のような例では、一文目は「から」と「からといって」いずれも問題ないが、続く二文目では「からといって」では不自然さが感じられる。

- (1) 薬を飲んだ {から／からといって}、風邪が治ったのではない。
しっかり寝た {から／# からといって} 治ったのだ。

典型的には、「からといって」は「のではない」「訳ではない」「とは限らない」など、何らかの否定表現と共起することが多い。(以下例文に ID(PB39.... 等) が付いているものは、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」からとったものである。)

- (2) a. レントゲン写真に写らなかったからといって、正常だとは限りません。(LBn4_00012)
b. しかし、無愛想だからといって、冷たいわけではない。(LBc9_00144)
c. ダイエット中だからといって我慢ばかりを**してはいけません**。(LBq5_00060)
d. ちょっとくらい有名だからといって偉ぶるな。(LBm9_00217)
e. カバーしたいからといって、厚塗りは**NG**。(OY07_00958)

一方、取立て詞「しか」のように必ずしも否定と共起しなくてはならないという訳ではない。

- (3) a. 踏み跡がしっかりついているからといって、安心しきってしまうのは危険だ。(LB17_00004)
b. ただ、誘うからといって下心があるかという点、違います。(OC09_12990)
c. いくらクリスマスだからといって、病院を抜けだすなんて！(OB3X_00288)
d. いくら自分のおこづかいだからといって毎日飲むのは …………… (OY03_06312)
e. 1年早く大学に入学したからといって何の意味があるのであろうか？ (LB10_00006)
f. いくら「必要性」があるからといって、ずいぶん乱暴な話ですね。(PM11_00378)
g. ケータイがつながらないからといって、間断なく電話するのはほとんどストーカー状態である。(PB13_00200)
h. もちろん、こう解説したからからといって、多くの人にはチンプンカンプンのままだと思います。(PN2a_00025)

先行研究においても、「からといって」が否定との共起のみならず、(3)のように話者の否定的な意見を反映するものや反語疑問文などでも使われると指摘されている(金子, 1998; 小金丸, 1990; 高橋, 2015;

藤田, 2000; 馬場, 2018; 山口, 1987)。しかし、「からといって」がどのような環境では現れないのか、なぜ上記のような分布を示すのかなど、理論的な説明は十分であるとは言えない。本研究では、記述的な先行研究を踏まえた上で、理論的な枠組みを用いて「からといって」の意味論的・語用論的説明を試みる。具体的には、先行研究で指摘されてきた「推論の否定」(金子, 1998; 小金丸, 1990; 高橋, 2015; 藤田, 2000) という意味的・談話的機能を捉えるために、Farkas & Bruce (2010) で提案されている Table (stack) model と呼ばれる談話構造に関する枠組みを導入する。

次の2節では、先行研究を元に「からといって」が使われる文及び文脈の特徴について確認する。3節では、Farkas and Bruce (2010) の Table model の基本的な考え方を紹介し、その考え方に沿って「からといって」の持つ「推論の否定」を表す方法を提案する。それをもとに4節では、2節で見た「からといって」の振る舞いがどのように説明できるか考察する。5節では、まとめと今後の課題を示す。

2 先行研究 (記述的観察)

2.1 高橋 (2015)

高橋 (2015) は、特に後件の特徴に着目し「からといって」を以下の8パターン (A、B、C1~C6) に整理しており、特に、否定形式を使用しないタイプのものについて実例とともに詳しく紹介している。

- (4)
- | | | |
|-----|--|--|
| A | 文法的否定形式を使用 | |
| B | 語彙的否定形式を使用 | |
| C | 否定形式を使用しない | |
| C1: | $\langle p \rightarrow q \rangle$ に対する非難や驚きを示す | C4: $\langle p \rightarrow q \rangle$ の否認と同内容を示す |
| C2: | $\langle p \rightarrow q \rangle$ に対する疑念を示す | C5: q と対立するような内容を示す |
| C3: | q がもたらす望ましくない事態を示す | C6: 後件が言語化されない |

上記 (2) で取り上げた例は高橋 (2015) の A に相当し、(3) については、(3-a) と (3-b) は B もしくは C4、(3-c) は C1、(3-d) は後件の一部が省略されているという点では C6 だが全体の意味からすると C1、(3-e) は C2、(3-f) と (3-g) は C1 もしくは C3、(3-h) は C5 に相当すると考えられる。

2.2 馬場 (2018)

馬場 (2018) は、「からといって」が使われる文の様々なパターンを以下の5グループに分類した上で、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」を用いて計量的な用例調査を行っている。

- (5)
- | | |
|---|--|
| A | P(。だ) からといって、Q{わけ／はず／もの}ではない等、Qとは{言えない／限らない}等 |
| B | P(。だ) からといって、Q{でない／しない／できない}等 (働き掛けなし) |
| C | P(。だ) からといって、Q{するな／してはいけない／しないでください／することはない／してほしくない}等 (働き掛けあり) |
| D | P(。だ) からといって、Q{ことは／のは／<名詞>は} <否定的コメント>、Q{すると／したら／しても等} <否定的コメント> |
| E | その他 |

その結果、接続助詞「～からといって」(100例) 及び接続詞「だからといって」(100例) のうち、A: 67例、B: 37例、C: 32例、D: 59例、E: 5例と報告されている。明示的な否定と共起するもの(上記(5)A~C、即ち高橋(2015)の(4)Aに相当するもの)が用例200例中136例と半数以上になっており、このことから「からといって」が典型的には否定と共起するということが裏づけられると同時に、明示的な否定がないものも決して少なくはないことが分かる。

2.3 「からといって」の特徴

上記を踏まえ、本研究においては、「明示的な否定表現と共起するもの」「明示的な否定表現と共起しないもの」に大きく分けて考える。なお、後者については、先行研究で指摘されている通り「非難や驚き」「疑惑」「望ましくない事態」など何かしら話者の「否定的なコメント」を示すものとする。

- (6) a. 明示的な否定表現と共起するもの：[[P からといって Q] 文否定]
- b. 明示的な否定表現と共起しないもの：[[P からといって Q] 否定的コメント]

意味的には、「P からといって Q」は「推論の否定」を表すと言われている(金子, 1998; 小金丸, 1990; 高橋, 2015; 藤田, 2000)が、ここでの「推論」は「P ならば Q」という条件的な意味であると考えられる。つまり、推論の否定とは「P ならば必ずしも Q であるとは言えない」ということになる。では、否定されるべき推論（「P ならば Q」という条件的な意味）がどのようにして得られるのか、またそれを否定するとはどういうことか、それをどのように理論的に形式化するかが、次なる課題といえる。

3 分析案

3.1 Table stack model (Farkas and Bruce, 2010)

ここでは、Farkas and Bruce (2010) により提案されている Table stack model あるいは Table framework などと呼ばれている、談話構造に関するモデルについて、その基本的な考え方を紹介する。Farkas and Bruce (2010) によると、談話において話者たちは discourse commitment (DC) と呼ばれる命題（可能世界の集合）の集合を個人的な意見・態度として各自持っており、そのうち話者たちが互いに共有できているもの (mutual commitments) は、common ground (cg) となる。談話が進むにつれ話者たちそれぞれの DC 及び cg は変化していくとされ、ある命題（あるいは命題の集合）P が話者により主張 (assert) され、cg に含まれるべきか否かを話者間で決める際、その P は under discussion として Table にあげられる。話者間で了承されれば P は cg の一部となり、されなければそのまま cg は変更されない。(本来は、以下 (7) に加えて、現段階の cg と T から予測される次の談話段階における cg のことである projected set (ps) と呼ばれるものもあるが、ここでは省略する。)

- (7) A context c consists of
 - a. cg (common ground): the set of propositions that have been agreed upon by all participants
 - b. T (Table stack): asserted propositions that are at issue and yet to be settled on
 - c. DC_x (discourse commitment set of participant x): a set of propositions that x has publicly committed to and have not yet become part of cg

例えば、話者 A が話者 B に向かって「今日は暑いですね」と会話を始めたとする。この時の談話の状態 (c_1) としては、話者 A は「今日は暑い」という命題 p を自身の DC として持ち、assertion (主張) として発言することで、 p を Table の上に載せ、 p を現段階の cg に加えるかどうか話者 B に持ちかける。

- (8) c_1 : 話者 A 「今日は暑いですね」
 - a. cg (common ground): {今日は○月○日、天気は晴れ}
 - b. T (Table stack): {今日は暑い}
 - c. DC_A (discourse commitment set of each participant A): {今日は暑い}
 - d. DC_B (discourse commitment set of each participant B): {}

次に、話者 B が「そうですね」と返事したとする。この時の談話状態 (c_2) では、命題 p は cg の一部となったため、 p は Table 上からも DC からも消え、話者 A、B ともに cg を通して p を共有できている。

- (9) c_2 : 話者 B 「そうですね」
- cg (**common ground**): {今日は○月○日、天気は晴れ、今日は暑い}
 - T (**Table stack**): {}
 - DC_A (**discourse commitment set of each participant A**): {}
 - DC_B (**discourse commitment set of each participant B**): {}

仮に、B が「そうですか？」のような返事をしたとする。この場合、おそらく B にとっては今日は暑くないので、Table 上の p は cg には含まれることなく、談話が進んでいくことになる。

- (10) c_3 : 話者 B 「そうですか？」
- cg (**common ground**): {今日は○月○日、天気は晴れ}
 - T (**Table stack**): {}
 - DC_A (**discourse commitment set of each participant A**): {今日は暑い}
 - DC_B (**discourse commitment set of each participant B**): {今日は暑くない}

(より正確には、このモデルでは、発話がある度、assertion (**A**)、assertion confirmation (**AC**)、total denial (**TD**) 等の各種 speech act operator によって context がアップデートされると想定されているが、それらの正確な定義については Farkas and Bruce (2010) の (9)(16)(21) を参照のこと。)

3.2 「からといって」の意味と談話における機能

上記の Table stack model を踏まえて、次に「からといって」の持つ意味的・談話的な機能について改めて考えてみる。「P から Q」と「P からといって Q」のいずれにおいても、話者は、P と Q が因果関係にあると表明している。因果関係をどのように意味的に形式化するかについては議論の余地があるところだが、ここでは坂原 (1985) に基づいて因果表現の分析を行った田村 (2009) と同様、「P から Q」は大まかに言う「P は真である、そして P ならば Q である」のような意味とする。なお、田村 (2009) では「P は真である」部分が主張に含まれるのか、前提であるのかについては明言はしていないが、ここでは前提 (つまり cg に含まれるもの) とし、主張 (Table に載るもの) は「P ならば Q である」部分の条件的意味であるとする。Q の真偽については、前提と Table 上の推論から真であると導き出されるため省略してある。

- (11) 「P から Q」 is defined only if $p \in s_1$
- cg : s_1
 - T : { $\forall w' \in \cap s_1 [p(w') \rightarrow q(w')]$ }
 - DC_A : { $\forall w' \in \cap s_1 [p(w') \rightarrow q(w')]$ }

ここでは「P ならば Q である」という条件的意味を $\forall w' \in \cap s_1 [p(w') \rightarrow q(w')]$ というふうに表記しているが、これは Kratzer の様相理論 (Kratzer, 1981) を想定して、モーダル “must” が主節に含まれる条件文 “if P, must Q” を簡略化して表したものである。Kratzer の様相理論では、モーダル表現を含む文は、modal base と ordering source という二つのパラメーターにより、その真理条件が決まるとされる。Modal base とは、その談話において前提とされている知識や状況 (可能世界の集合) であり、その種類には epistemic conversational backgrounds (in view of what is known) や deontic conversational backgrounds (in view of what is commanded)、stereotypical conversational backgrounds (in view of the normal course of events)、buletic conversational backgrounds (in view of one wishes) など、状況に応じて様々なものがある。Ordering source とは、それら可能世界の集合に「事実に即して正しい順」「規範に基づいて正しい順」「常識的に考えて可能性が高い順」「望ましい順」などのような順序づけをする。通常、慣例として modal base と ordering source を決定する関数をそれぞれ $f(w)$ 、 $g(w)$ として、真理条件を表す際に $\llbracket \text{if P must Q} \rrbracket^{f,g}$ などと表記することが多いが、ここでは $f(w)$ 及び $g(w)$ あるい

はそれらに相当する部分を省略している。強いというなら、 $\forall w' \in \cap s_1$ 部分が modal base を表す部分に相当するが、これはあくまで暫定的な仮の表記で、モーダルの意味（特に modal base 及び ordering source の二つのパラメーター）をこの Table モデルにおいてどのように表すかについては、更に検討が必要である。

一方、「P からといって Q」については、Table に載るのは「P から Q」と同様「P ならば（必ず）Q」という条件的意味だが、「P から Q」と違って DC_A に「P であっても Q でない可能性がある」、つまり Table 上の「P ならば（必ず）Q」と相反するものがあるとする。

- (12) 「P からといって Q」 is defined only if $p \in s_1$
- a. $cg: s_1$
 - b. $T: \{ \forall w' \in \cap s_1 [p(w') \rightarrow q(w')] \}$
 - c. $DC_A: \{ \exists w' \in \cap s_1 [p(w') \wedge \neg q(w')] \}$

これを踏まえ、冒頭の (1) を考えてみる。

- (13) 薬を飲んだ {から／からといって}、風邪が治ったのではない。
 しっかり寝た {から／# からといって} 治ったのだ。

一文目では「のではない」という文否定があるため、「から」「からといって」いずれにおいても Table 上の「P ならば（必ず）Q」という条件的意味部分が否定される ($\neg \forall w' \in \cap s_1 [P(w') \rightarrow Q(w')]$)。「からといって」においては「P (=薬を飲んだ) であっても Q (=治った) でない可能性がある」という DC があるが、文否定が影響を及ぼすのは主張 (Table 上のもの) のみであるとする、この DC の内容は否定の対象とならない。一方、二文目で「からといって」が不自然になるのは、DC 内容に「P (=寝た) であっても Q (=治った) でない可能性がある」とあり、それを話者が自分の意見として表明しているのは、この文脈においては適切ではない。なぜなら、ここでの話者は、治った理由は薬ではなく睡眠である、つまり薬の服用は治ることに繋がるかもしれないし繋がらないかもしれないが、睡眠は必ず治ることに繋がる（睡眠を取れば必ず治る）という意図があるからである。つまり、睡眠が治ることに必ず繋がると言いたい場面において、DC 内容に睡眠をとっても治らない可能性がある」と表明しているのは、話者の中で辻褃があっていないといえる。

4 考察

4.1 明示的な否定がある場合：否定の位置と（隠れた）モーダル表現

冒頭の (2) にあるような明示的な否定形式を伴うものについては、次の (14-a) のように否定が文全体をスコープにとることを前提としており、これが (14-b) であると上記のような説明はできない。

- (14) a. [[P からといって Q] ない]
 b. [P からといって [Q ない]]

実際、先行研究で挙げられている用例やコーパスを眺めてみても、述語の否定形 (e.g. 「しない」) より「のではない」「訳ではない」「とは限らない」のような文全体を否定するような（強制的に文全体をスコープに取る解釈を促す）否定形式が多い。これについては、先行研究においても、述語に直接否定がつくようなものは容認度が落ちるとの指摘もある (小金丸, 1990)。

- (15) a. 作家だからといってよく本を読むとは限らない。(小金丸 1990 (20))
 b. ??作家だからといってあまり本を読まない。(小金丸 1990 (22))

とはいえ、実例の中には、下記のように直接述語が否定の形をとるものも少ないながら見つかる。

- (16) a. 長だからといって甘い罰は許されない。(LBq9_00081)
b. 電灯が消えたからといって、目は離せない。(LBc9_00176)
c. 自分たちには特に被害がないからといって、安心はできない。(PB39_00612)
- (17) a. また、タバコのことを常に考えてしまうからといって心配しない。… タバコを身につけない。他の喫煙者を避けない。タバコをやめたからといってライフスタイルを変えない。以上の指示に従えば、… (LBk4_00005)
b. 公務員上がりだからといって気にしない。やってみましょう。(OC04_02124)

(16)に関しては、「許されない」「離せない」「できない」など述部が可能形となっており、形式上は動詞に直接否定がついたものとなっているが、「{許す／離す／安心する} ことができない」と言い換えられることから分かるように、文全体のモダリティ（能力に基づく可能性）に否定がついていると考えられる。上記(17)については、前後の文脈を読み取る必要がある。(17-a)は「タバコをやめたからといってライフスタイルを変えない」だけを前後の文脈なしに解釈しようとする(15-b)のように不自然に感じられるかもしれないが、文脈から「やってはいけないことリスト」に列挙されているものの一つであることがわかる。つまり、「タバコをやめたからといってライフスタイルを変えてはいけない」だと解釈される。(17-b)も同様に、文脈から推測するに、どうやらアドバイスを与えているという話の流れだということが分かる。つまり、「公務員上がりだからといって気にしてはいけない」となる。

上記(15-b)で容認度が落ちるとされた例においても、述部を可能形にしたり、文脈を多少付け加えれば、容認度はあがるように感じられる。

- (18) a. 作家だからといってあまりたくさんのは読めない。
b. 作家だからといってあまり本も読まないし、一日中書いてるようでもなさそうだし、あまり作家らしくないね。

上記(15-b)のように述語に直接否定がつく（しかも十分な文脈が与えられていない）場合は、[作家だからといって[あまり本を読まない]]というふうには、理由節が否定のスコープに含まれずに解釈されやすく、結果不自然になると考えられる。つまり、「からといって」が自然に解釈されるには、否定が理由節を含めて、少なくとも意味解釈的には、文全体をスコープにとれるようになっているという特徴があると思われる。

4.2 明示的な否定がない場合：否定的なコメントと modal base

冒頭(3)でみたように、そして高橋(2015)など先行研究でも指摘されているように、「からといって」の後件には、明示的な否定がない場合は、「非難や驚き」「疑念」「望ましくない事態」など話者の否定的なコメントが続くとされる。この点について、上記で提案した「からといって」の持つ意味を改めて考えてみる。上記提案の中では、先行研究(田村 2009)に倣って理由・因果関係を表す「から(といって)」には、基本的には「PならばQ」という条件的意味があるとした。Kratzer流の様相理論に従って考えれば、条件文は後件のモーダル要素と深く関わっており、具体的には、条件節(前件)が後件のモーダルが示す modal base に制限を付け加えるものである。つまり、条件文と同様、理由節「から(といって)」も後件のモーダル要素と関わり、文全体のモーダルの解釈に影響を与える。更に「からといって」の場合は、主張とは相反する内容を話者の意見として表すため、「非難や驚き」「疑念」「望ましくない事態」などを示すような文脈においてのみ使われる。モーダルには、epistemic、deontic、stereotypical、buletic など様々な種類があるが、「驚き」は epistemic や stereotypical conversational background から、「非難」や「疑念」は deontic conversational background から、「望ましくない事態」は buletic conversational background から来るというふうには考えれば、「否定的コメント」と一言に言っても色々な種類のものが

あるのは、文全体のモーダルの解釈 (modal base) が多様な解釈を可能としているからだというふうに捉えられる。

5 まとめ

本研究では、「からといって」が使われる文と文脈の特徴について、記述的な先行研究の観察をもとに、理論的な説明を試みた。特に、「からといって」の持つ「推論の否定」という意味的・語用的特徴を捉えるべく、Table や DC という概念を導入した談話・文脈に関するモデル (Farkas and Bruce, 2010) を想定し、「推論の否定」の意味を Table 上の主張とは別に話者の DC の内容にあるとした。更に、「から(といって)」の表す理由・因果関係の意味を条件的意味の一種と捉え (田村, 2009)、それにより、条件文の解釈において欠かすことのできないモーダル要素との関係を示した。

しかし、「理論的な説明」とはいいつつも、実際は理論的な説明に向けた分析の方向性を提案したに過ぎず、厳密に形式的な分析を行うまでには至っていない。特に、(i) 「からといって」を含む文の統語構造を明らかにした上での構成的な意味計算について、そして (ii) Farkas and Bruce (2010) の Table モデルにおいて条件的意味を扱う場合、Kratzer 流の様相理論をどのように組み込むかについて、ここでは十分に明らかにできていない。後者の点については、例えば Rudin (2018) が命令文を分析の対象として、doxastic と teleological の二種類の context を想定した bifurcated Table model を提案したり、Bledin and Rawlins (2019) が条件文を Table モデルで扱うために assumption slot という一時的な context set を提案したりと、近年 Table モデルを必要に応じて拡張した理論的研究が進みつつある。従って、今後の課題としては、そのような理論的拡張を参考にしつつ、理由・因果関係の意味およびモーダルの意味 (特に modal base と ordering source の二つのパラメーター) について、Table モデルを用いてより詳細に形式化していくことが考えられる。

参考文献

- Bledin, Justin and Kyle Rawlins (2019) “What ifs,” *Semantics and Pragmatics*, Vol. 12.
- Farkas, Donka F. and Kim B. Bruce (2010) “On Reacting to Assertions and Polar Questions,” *Journal of Semantics*, Vol. 27, No. 1, pp. 81–118, February.
- Kratzer, Angelika (1981) “The Notinal Category of Modality,” in Eikmeyer, H.-J. and H. Rieser eds. *Words, worlds, and contexts*, pp. 38–74: de Gruyter.
- Rudin, Deniz (2018) “Rising Imperatives,” in *Proceedings of Semantics and Linguistics Theory 28*, pp. 100–119.
- 金子比呂子 (1998) 「「論の流れ」をつくるための指導—「だからといって」をめぐる—」, 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』, 第 24 巻, 33–47 頁.
- 高橋美奈子 (2015) 「カラトイッテ類が介在する文における推論否定の表現について」, 日本語/日本語教育研究会 (編) 『日本語/日本語教育研究』, 47–62 頁, ココ出版.
- 坂原茂 (1985) 『日常言語の推論』, 東京大学出版会.
- 山口佳也 (1987) 「「からといって」について」, 『十文字学園女子短期大学研究紀要』, 第 19 巻, 7–11 頁.
- 小金丸春美 (1990) 「相手の推論を否定する形式をめぐる—「～といっても」と「～からといって」—」, 『梅花短大国語国文』, 第 3 巻, 25–41 頁.
- 田村早苗 (2009) 「様相論理にもとづくタメニの分析試論: 「目的」と「因果」の接点」, 『京都大学言語学研究』, 第 28 巻, 159–184 頁.
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』, 和泉書院.
- 馬場俊臣 (2018) 「「(だ) からこそ」「(だ) からといって」「(だ) からか」について」, 藤田保幸・山崎誠 (編) 『形式語研究の現在』, 123–150 頁, 和泉書院.